

## 96 誌上発表

## 漢蘭折衷医学の人々とその蔵書

清水 信子

二松學舎大学 非常勤講師／北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究部 客員研究員

江戸時代中期から後期以降、医学修学の過程において、複数の医学塾に通い、漢方と蘭方を兼学することが一般的となりつつあり、漢方、蘭方、両方を採り入れた漢蘭折衷医学は、著名な医家から在村医まで広く行われたと言えよう。本発表では、それら漢蘭折衷医学の人々の蔵書に着目し、その一端を紹介する。

## ○難波家蔵書

難波家とは、江戸時代後期、備前・金川に生まれ、漢蘭折衷医として郷里の医療に従事した難波抱節(1791～1859)と、その子経直(1818～1884)を中心とした難波家の蔵書で、現在、労働科学研究所に「温知堂文庫」として所蔵される(『医史学雑誌』第60巻第2号p.206抄録参照)。抱節は京坂に遊学し、内科を吉益南涯に、産科を賀川蘭齋に、外科を華岡塾に、そして緒方洪庵に種痘術を学び、経直も同様にして、吉益流、賀川流、華岡流を修学している。蔵書にはそれらの修学の経歴が現れ、吉益南涯、東洞父子の『傷寒論』『類聚方』関係、賀川流産科関係、華岡流外科関係などが多見する。そしてそれら各種蔵書には、綿密に校訂が施され、また詳細な書き入れがあるなど、実際に学んだ軌跡が窺知される。

中で、華岡家に関係した資料について紹介する。まず、華岡青洲著『春林軒膏方便覧(春林軒法方録)』は、その書写識語に「文化十癸酉八月二十八日夜於泉州合水堂樓膳写之／中邑玄瑞翼蔵書」とあり、文化十年(1813)に中邑玄瑞が、華岡塾春林軒の分塾合水堂で書写したものである。玄瑞は抱節と同郷で、『春林軒門人姓名録』(日文研宗田文庫蔵)によれば、文化十年に合水堂に入門している。その合水堂は泉州で興り、後に大坂中之島に移るため、その設立初期に入門した玄瑞が、その入門当初に書写したことがわかる。また現在、合水堂の泉州における記録が乏しい中、その事実が記されたものとして貴重な資料であろう。尚、抱節は翌文化十一年に春林軒に入門しているが、抱節蔵書中に見える吉益南涯『観証辨疑』を校訂した『(校本)観証辨疑補附言』の識語には、同年七月から十月にかけて、該書を泉州で校訂したとあり、これも「泉州合水堂」の記録として注目される。

次に、奥劣齋著『女科随劑三卷』は、抱節の家塾忠誠堂の用箋にその門人達が寄合書したもので、書写識語には「天保八丁酉年冬十二月十二日始揮筆於環／翠樓至十七日卒業 筆者姓名 備前蓮岡武三 備中藤野馬太／(中略)／都十二人 磨墨 播州横山茂太郎 金川／丸川省三 摺板 高尾厚甫 校正人名 武三右馬太敬叔厚甫及東里主人」と、その書写者が列挙されている。また識語に続く末題下部には「原本紀州華岡氏所蔵」とあり、華岡家蔵書を移写したことが知られるが、該書の著者奥劣齋(1780～1835)は、内科を山脇東門に、産科を賀川蘭齋に学んだ江戸後期の産科医であり、その著作を華岡家が所蔵していたことは興味深い。

## ○伊藤鹿里(忠岱)蔵書

伊藤鹿里(1778～1838、字忠岱、号鹿里)は信濃・春日に生まれ、医学を吉益南涯に、漢学を大田錦城に学び、漢蘭折衷医学、考証学に通じた在村医である。その蔵書は、現在、後裔宅に管理されるが、大部分が自筆本で、他者から原本を借りて移写したものの他、講義の聞書類が散見する。蔵書中の医書の分野を見ると、師事した吉益家をはじめとする『傷寒論』『金匱要略』関係から、賀川流産科、華岡流外科、池田痘科、また荻野元凱の刺絡、吐法など多岐に亘る。これは、当時地方でも、漢方蘭方多分野の医学を学ぼうとする気風が広まっていたことを示すものであろう。

今回、僅か二つの例を紹介したのみであるが、今後は、さらに諸家の蔵書の実態を整理し、それら蔵書から、当該時期における漢蘭折衷医学の実像を明らかにしたい。

(本発表は、文科省科研費助成・基盤研究(B)「近世後期の医学塾からみる漢蘭折衷医学の総合的研究」(研究代表者:町泉寿郎,課題番号25282066)による研究成果の一部である。)